

公民的分野における社会的事象の見方や考え方を深める指導の工夫（第二年次）

— 「効率」「公正」の視点から —

長期研究員 樋上 聖

I 研究の趣旨

公民的分野のねらいは、公民として必要な基礎的教養を培うことにある。また、多くの生徒は他の分野よりもこの分野を学ぶ重要性を感じている。しかし、私の授業は一方的な重要語句の説明中心で、公民として必要な基礎的教養を十分に育成している授業とは言えなかった。そこで、社会における様々な社会的事象を客観的にとらえることができる力を育成することが、この分野のねらいを達成し、生徒の声にこたえることになると考えた。そのために、生徒が複数の視点を通して、社会的事象をとらえることができる指導をめざすことにし、上記のような研究主題を設定した。

II 研究の概要

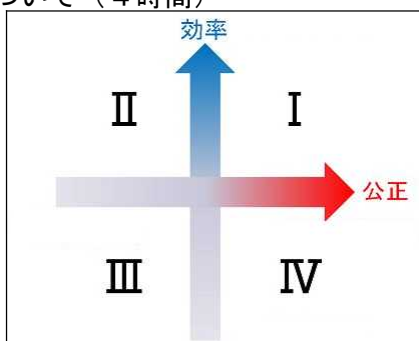
1 研究仮説

公民的分野における社会的事象を「効率」「公正」という視点からとらえさせることで、生徒はその事象がどのような仕組みで成り立ち、どのような問題を抱えているのかを分析、思考できるようになり、見方や考え方が深まるであろう。

2 研究の内容と実際

(1) 実践授業Ⅰについて（４時間）

「現代社会の見方や考え方」の単元で実践した。生徒にきまりは対立から「効率」「公正」という見方や考え方に



基づいて合意した。図1「効率」「公正」か判断する図結果であると気付かせ、きまりがあることで社会が成り立っていくことを理解させることがねらいである。生徒は、「効率」「公正」か判断する図（図1）

を活用しながら、教科書にある自治会規約を改善したり、テーマパークで導入しているシングルライダーの仕組みを分析したりすることで、きまりが社会を支えていることを理解した。

(2) 実践授業Ⅱについて（４時間）

「新しい人権」の単元で実践した。環境権、知る権利とプライバシーの権利、自己決定権それぞれに関わる事例を「効率」「公正」の視点から判断していくことで、新しい人権について理解させることがねらいである。日照権に関するビルの形状、知る権利に関する首相動静、自己決定権に関する手術同意書、それぞれの事例について図1を活用しながら、とらえさせていく中で新しい人権を理解させた。生徒は、人権は「公正」でなければならない権利であるとしながらも、互いが利益を得るものでなければならない、つまり、図中「Ⅰ」の象限にあることに気付いた。そこに、新しい人権が生まれてきた背景があることを理解した。

(3) 実践授業Ⅲについて（４時間）

「くらしと経済」の単元で実践した。私たち消費者に関わる身近な事例を「効率」「公正」の視点から判断していくことで、消費者と生産者や販売者、消費者主権、流通の合理化など消費者を中心とした経済活動について理解させることがねらいである。コンビニエンスストアの立地、クレジットカードの仕組み、クーリングオフ制度の背景、POSシステムの仕組みなどのそれぞれの事例について図1を活用しながらとらえさせていく中で、身近な経済活動を理解させた。生徒は消費者だけでなく、生産者や販売者の立場も考慮し、経済は資源の最適化をめざし「効率」を重視するものでなければならないと気付いた。さらには、消費者だけでなく生産者や販売者も納得する、つまり図中「Ⅰ」の象限にあることが身近な経済活動であることを理解した。

(4) 社会科通信について（２回実施）

社会科通信（図２）は、実践授業での学習内容と関連した社会的事象を考えさせることで、広く社会に目を向けさせていくことをねらいとしたものである。教師が新聞から一部抜粋した記事に対して、生徒に「効率」「公正」の視点から判断

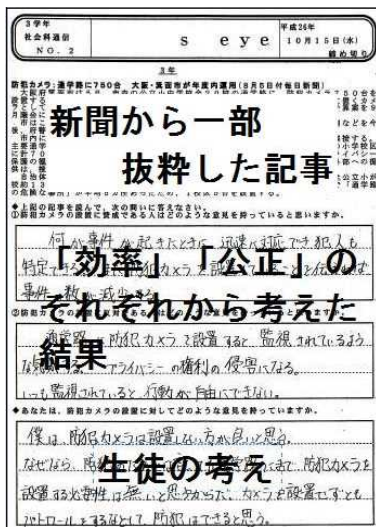


図２ 社会科通信 2号

させた後、自分の考えを書かせた。主に家庭学習として取り組ませた。第１回は、実践授業Ⅰ後に実施した。「ベビーカー：電車やバスに優先スペース表示」の記事を取り上げ、ベビーカーの優先スペースを設けることが「効率」「公正」の視点からどうなのか判断させた後、この制度に対しての意見を書かせた。第２回は、実践授業Ⅱ後に実施した。「防犯カメラ：通学路に750台A市が年度内運用」の記事を取り上げ、防犯カメラの設置に賛成や反対の人は、どんな根拠を持つかを考えさせた。さらに、その根拠が「効率」「公正」の視点からどうなのか判断させることで、生徒は事象を客観的にとらえることができた。その上で自分の考えを書くことにより、今の社会で起きている事象に目が向くようになった。

(5) 生徒の実態から

実践授業終了後、社会的事象に関わる用語が理解できたかを測るため、過去の県立高等学校入試問題を基に作成したテストを実施した。その結果は、どの問題においても県の正答率を上回った（図３）。

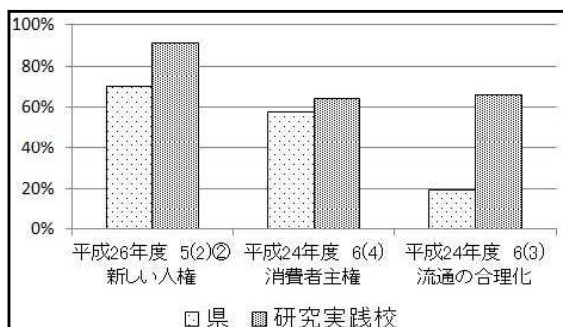


図３ 県立高校入試問題を抜粋したテストの正答率

実践研究終了後に実施した生徒の実態調査において、多くの生徒は社会的事象への興味や関心が高まり、以前より自分なりの考えを持つことができるようになったと回答した（図４）。

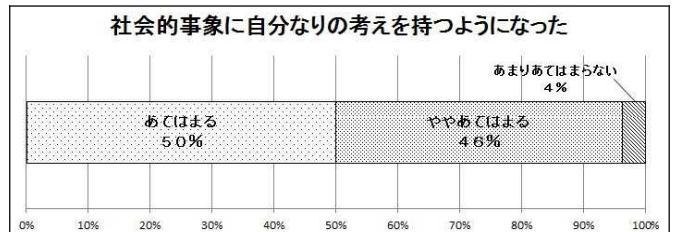


図４ 生徒の実態調査の一部

これらの結果から、身近な事例を「効率」「公正」の視点からとらえさせることで、生徒にとって社会的事象への理解が深まっただけでなく、社会的事象への興味や関心が高まり、多様に見たり、考えたりすることができるようになったと考えられる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

生徒にとって身近な事例を用いて、「効率」「公正」の視点から社会的事象をとらえてさせていくことは、生徒の見方や考え方を深めるには有効であった。さらに、人権の単元においては「公正」を中心に、経済の単元においては「効率」を中心にしてとらえさせていくことで、生徒の人権や経済への見方や考え方が深まることが分かった。また、学んだ内容を基に、今の社会で起きている事象を「効率」「公正」か考えさせていくことで、社会に参画していく資質や能力の育成につながることも分かった。

2 今後の課題

「効率」「公正」という見方や考え方を生徒に理解させるには、多くの時間が費やされた。今回のような授業を年間通じて数回行うことで、この課題は解決されるであろう。生徒の見方や考え方を深めていくためには、他の単元や分野全体を見通しながら、今回のような授業を計画的に実践していかなければならない。また、生徒の見方や考え方が深まった具体的な姿を明確にした上で、「効率」「公正」の視点からとらえさせていく指導をどう取り入れていくのかを模索していかなければならない。